



全日空客室乗務員に手渡される若布



5月祭事暦

- 1・15日 月次祭  
午前10時～  
高宮祭  
第二宮・第三宮祭  
宗像護国神社祭(1日)  
午前11時～  
総社祭  
浦安舞奉奏(1日)  
豊栄舞奉奏(15日)
- 5日 五月・浜宮祭  
午前10時30分～  
浜宮祭  
於=宗像市神湊 浜宮  
午前11時～ 五月祭  
於=宗像市江口 五月宮
- 5日 沖・中両宮春季大祭  
午前11時～  
於=大島・中津宮
- 27日 沖津宮現地大祭  
午前7時大島港 出港  
於=沖ノ島・沖津宮

「若布献上の儀」

宮中、東宮、三笠宮家へ献上

「その年最初に採取された最上の若布を、まず宗像大神と陛下へ」という宗像の漁業関係者の思いのもと、磯の香も芳しい濃緑の見事な若布が、三月二十二日高向宮司、漁協関係者らによって、賢所、天皇皇后両陛下、皇太子同妃両殿下、三笠宮殿下へ献上された。

この「早春の玄界灘産天然若布」の皇室への献上は、昭和三十八年に宗像七浦(大島・鐘崎・神湊・勝浦・地島・津屋崎・福岡)と呼ばれるこの地域の漁協組合員で結成された「宗像大社海洋神事奉賛会」設立時より始められ、今年で五十回という節目を迎えた。

近年の異常気象の影響により生育が心配されたが、本年は順調で三月一日より地島沖で採取が開始され、海上が時化る日も多かった



奉告祭後、神社を出発する一行

余滴

人知を超えた自然の猛威をみせつけた東日本大震災。復興や防災対策が進む中、神社の存在が改めて注目されていることをご存じであろうか▼被災地で全壊及び半壊した神社は三百社を超えるが、仔細にみていくと、約千年以上鎮座する延喜式「式内社」と呼ばれる神社は殆ど残っている。実はこれらの古社は「貞観の大地震(八六九)を経験しているため、想定内」なのである。そのため被災地では、「大地震がきた時には神社に逃げ込め」という言い伝えがあり、実際に命を救われた方々も大勢おられる▼昨年TBSの特集で「神社の手前」津波が止まったわけ?という番組が放映されたが、被災地ではそのような風景が各地で散見される。東日本大震災の津波マップでも、津波の到達点の際には不思議な程「鳥居マーク」があるが、これらは先人たちが後世の人々に残したメッセージのようにもみえる。現在、様々な見地からの検証がなされているが、政府も発想を少し変えて、先人たちの声に耳を傾けるべきではないだろうか▼戦後憲法には厳格な政教分離というものがあり、神社はこれによく抵触するとして、その存在すら無視されることがある。

しかし、千年後の我々の子孫に確実に伝え残すには、言葉を超えた伝達方法が重要であり、そのためには「千年或いはそれ以上の時空間を超えてきた神社にも」と着目すべきではないかと思う。(敬)

神具・装束・授与品

井筒

装束店	〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る
フリーダイヤル	0120-075-980
福岡店	〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401
フリーダイヤル	0120-055-092
授与品店	〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23
フリーダイヤル	0120-075-820

木組の家 匠の技

総合建築業 **株式会社 弘江組**

〒811-3406 福岡県宗像市稲元4丁目20 電話(0940)32-2567



本年の献上者、左より藤島氏・児島氏

が、関係者の御尽力により肉厚で磯の香り豊かな見事な若布が採取された。  
若布は地島名産の椿油を塗った板上で天日干しする「板干し」と呼ばれる製法で丹精込めて調整され神社に納められた。神社では神職と巫女が厳選して形を整え、規程の量つつ袋に入れたものを杉箱に納めるといった諸準備が進められた。  
上京前日の二十一日午前九時、若布と献上者はお祓いされ本殿で奉告祭を斎行、神社職員らが見送る中、神社を出発した。

到着した福岡空港では、若布と献上者が搭乗する全日空機二五四便の搭乗口で、当大社巫女から客室乗務員へと若布を手渡すセレモニーが行われた。同便搭乗予定の乗客や報道関係者が見守る中、高宮司以下献上者と例年若布献上に際してご協力いただいている全日本空輸(株)の関係者が整列、当大社巫女より客室乗務員へ若布が手渡され厳粛裡に機内へと運ばれた。  
さらに搭乗が始まると、同便で上京する乗客全員に巫女より記念品として鯛の縁起物が手渡され、空港での全ての行事が終了、一行は空路東京へと向かった。  
献上当日の二十二日は午前十時、坂下門から宮中へ参内、掌典長手塚英臣氏に高向宮司が若布献上で参内の旨を言上、同掌典長を通じて賢所に献上申し上げた。  
続いて、侍従職牛久豊氏を



搭乗客に記念品を手渡す巫女

通じ天皇・皇后両陛下へ献上申し上げ、宮殿にて高向宮司が記帳し終えた後、宮中三殿参拝の栄に浴し宮中での献上の儀を滞りなく終えた。宮中を辞した一行は赤坂御用地へ向かい、東宮侍従櫛田泰宏氏を通じて皇太子・同妃両殿下へ献上申し上げ、更に三笠宮付宮務官板倉幸治氏を通じて三笠宮家へも献上申し上げ、宗像大社並びに海洋神事奉賛会による春の重儀「若布献上の儀」は滞りなく終了した。  
尚、本年の若布献上に際し、格別の御支援を賜りました出光興産(株)、全日本空輸(株)をはじめ、御関係の皆様方には紙面をもちまして厚く御礼申し上げます。

本年の若布献上者は左記の通り。

宗像大社

宮司 高向 正秀  
権禰宜 鈴木 祥裕

宗像漁業協同組合

地島支所長 児島 久幸  
課長補佐 藤島 正浩

第33回

春季奉納吟詠大会

四月七日(土)、春麗らかな陽気の中、春季恒例の神賑行事である奉納吟詠大会(主催・鶴洲流、宗家・河野鶴聲)が開催された。この大会は昭和五十一年より奉納されており、今回で第三十三回大会を迎えることとなった。

午前十一時三十分、当大社本殿において北九州地区を中心に近隣地区より同会員六十五名が参集し、正式参拝



本殿にて献吟する会員一同

並びに奉納吟が行われた。奉納吟では国民道祖神の大神に、松口月城先生奉納の「宗像宮」を会員一同で献吟、満開の桜の中境内に朗々と響き渡ると、多くの参拝者とその美声に聴き入り暫し足を止め深い感銘を受ける様子が見られた。  
献吟後、一同は清明殿へと移動し式典が開会され、会員各々が順次日頃鍛えた自慢の喉で吟題に沿った吟詠が披露された。午後三時には当大社における日程の全てを終えて、一同バスにて直会会場へと移動した。



# 春季大祭 齋行

四月一・二日の両日、境内の桜は例年に比べ開花が遅れ五分咲きではあったが晴天に恵まれ、日・月曜日ということもあり多くの氏子・崇敬者らで賑わう中、春季大祭が斎行された。

四月一日午前十一時、高向



地元中学生による浦安舞



保存会による風俗舞

宮司以下神職、氏子奉幣使、立部瑞真鎮国寺副住職、主基地方風俗舞保存会員、浦安舞奉仕者、総代等が齋館前に列立し本殿へ参進。国家鎮護・皇室安泰・五穀豊穰を祈念し祝詞奏上、続いて氏子会を代表し原崎智仁氏が氏子奉幣使として奉幣詞を奏上された。

次いで、保存会の御奉仕により、宮中舞樂の手振りを伝える「主基地方風俗舞」、更に玄海中学校女子生徒による「浦安舞」が奉奏され、麗らかな神苑に悠遠な平安絵巻が繰り広げられた。



本年の氏子奉幣使 原崎氏(右)

翌二日は、午前十一時より二日祭が斎行され、海上安全、大漁満足が祈念された。祭典後には海洋神事奉賛会事業に対し功労のあった会員九名に、当大社より感謝状と記念品が贈呈された。

その後、高宮、第二宮、第三宮、宗像護国神社へと、宮司以下各神職・参列者がそれぞれの祭場へ進み、各所で春祭が斎行された。

宗像護国神社春季大祭では、福岡県護国神社宮司・田村豊彦氏、宗像・福津両市の遺族連合会長をはじめ多くのご遺族が参列する中、護国の英霊をお慰め申上げると共に、遺族並びに両市民の弥栄が祈念された。

同刻儀式殿に於いては、交通安全講話が斎行され、講

員皆様の今年一年の交通安全が祈念された。

午後二時からは、本殿に於いて献茶祭が行われ日頃熱心に茶道を学んだ当大社巫女が、南坊流の袱紗さばきも爽やかに御点前を披露した。

かくして二日間に亘る春季大祭も無事斎行され、春の大神事も滞り無く終了した。

この春季大祭は、昭和三十年代まではこの時期に当大社所蔵の御神宝・古文書を虫干しし一般に公開する祭事が行われていた。これを秋の「放生会」に対し「保存会」と称し、人々の楽しみとなっていた。

昭和三十九年の宝物殿竣工に伴い、保存会の呼称もいつし



本殿へ参進する祭員・参列員

- 各奉仕者、表彰者は次の通り**
- 氏子奉幣使**  
原崎智仁氏(福津市若木台)
- 主基地方風俗舞奉仕者**
- |       |       |
|-------|-------|
| 清水 陽介 | 石津 典秀 |
| 中野 久志 | 花田 敬章 |
| 松井徳一郎 | 菊本 兼二 |
| 松井 実  | 中野 正徳 |
|       | 吉田 光利 |
|       | 森 勝紀  |
- 浦安舞奉仕者**
- |       |       |
|-------|-------|
| 磯辺かえで | 田中 佐季 |
| 中村あやみ | 三苫 愛海 |
- 海洋神事奉賛会事業功労者**
- |                 |
|-----------------|
| 永嶋 幸政 (宗像漁協・本所) |
| 高橋 弘昭 (同)       |
| 丸井 義明 (同・大島支所)  |
| 遠藤 久幸 (同)       |
| 宮坂 芳信 (同・福岡支所)  |
| 永島 光生 (同・津屋崎支所) |
| 花田 正武 (同)       |
| 占部 吉文 (鐘崎漁協)    |
| 権田 道雄 (同)       |

# 春季奉納 剣道大会



師範による居合切り奉納

四月一日春季恒例の剣道大会が行われ、七才の小さな剣士から中学生までの剣士約二百名が日頃の成果を競った。午前九時、会場の玄海中学校体育館で行われた開会式では、まず参加者、審判員、保護者ら一同で宗像大社を遥拝、続いて日本剣道形・居合の師

範五名による演武が披露され、緊張感のある佇まいに一同圧倒された。競技は開会式終了後から開始され、日頃稽古で鍛えた成果を発揮しようと、掛け声を張り上げて相手に挑む豆剣士達の姿が印象的であった。体こそまだ小さいものの、必死の形相で相手に喰らいつく様子は一人前の剣士の姿であった。

また同十時には春季大祭で賑わう本殿横で、開会式同様に二名の師範が代表参拝し、神前で居合切りを奉納し大会の無事安全を祈念された。

競技は昨年に続き、城山中学校が男女共に団体戦で三位以内に入賞するなど健闘をみせ、約五時間に亘る熱戦も午後二時過ぎには閉会、参加者は自らの力を出し切った清々しい表情で会場を後にした。



## 試合結果(優勝)

### 団体戦

#### 【小学生】

宗像東部

#### 【中学生】

男子 河東中学校  
女子 城山中学校

### 個人戦

#### 【小学生】

1年生 古野 美優(日の里)  
2年生 元兼 楓(河東)

3年生 大和 凌太(河東)

4年生 嶋立 将也(自由ヶ丘)

5年生 澤田 隆広(日の里)

6年生 横山 貴仁(玄辰館)

#### 【中学生】

男子 澤山 采希(日の里)  
女子 山本 真優(城山中)

## 神職 新人紹介

4月1日付で、神職2名、巫女2名の職員が新たに加わりましたので、ご紹介致します

①名前 ②生年月日 ③出身 ④経歴(学歴) ⑤特技(趣味) ⑥好きな食べ物 ⑦嫌いな食べ物 ⑧奉職理由 ⑨抱負



むなかた たかし  
①宗像 崇史  
②昭和58年3月生まれ (29歳)  
③北九州市八幡西区木屋瀬  
④県立八幡中央高校卒 皇學館大學 文学部 神道学科卒 岩木山神社奉職(5年間)  
⑤音楽鑑賞、娘(1歳9ヶ月)の成長を見守ること。  
⑥肉全般(特にハンバーグ)  
⑦トマト

⑧大学卒業時、遠縁にあたる宗像姓を継ぎ、福岡で育ったこともあり、宗像大社での奉職を希望しました。  
⑨この度、ご縁いただき宗像大社でご奉仕させていただくことになりました。一日も早く宗像に馴染み、一生懸命にご奉仕致します。尚、弟もこの4月より宗像市役所に勤務しております。兄弟あわせて、神郡宗像のために奉仕させていただきますので、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。



あしづ たかゆき  
①葦津 敬之  
②昭和37年11月生まれ (49歳)  
③福岡市箱崎  
④皇學館大學 文学部 神道学科卒 熱田神宮奉職 神社本庁奉職  
⑤ライフワーク 自然環境問題  
⑥⑦好き嫌い一切なし

⑧ご縁いただき、小学6年まで育った宗像に39年振りに戻って来ることになりました。懐かしい気持ちと責任の重さを感じております。  
⑨現場の実験経験は、熱田神宮で出仕としての2年余りしかないので、神職としての勉強を一から始め、宗像大神様が喜ばれることとは何かを第一に考え、神明奉仕に努めて参りたいと思います。

# 鎮国寺花まつり

桜花爛漫の宗像大社・鎮国寺間を

約三〇〇名の稚児行列が進む

四月八日、今年で六年目を迎えた宗像観光協会企画の「鎮国寺花まつり」が行われ、稚児装束を装った子供達約一四〇名に家族ら総勢約三〇〇名が、桜花爛漫、桜や菜の花が咲き乱れる宗像大社から鎮国寺までの約一キの道のりを元気に歩いた。

ご存じの通り、四月八日はお釈迦様の生誕を祝う法会の「仏生会」「灌仏会」これに子供達に宗像を代表する両社寺

を身近に感じてほしいと観光協会が企画し例年好評を博している。

当日は午前十一時に宗像大社を正式参拝、宗像大社氏子青年会、ボーイスカウトの誘導・警護により、鎮国寺までの約一キの道のりを歩いた。

同寺に到着すると、一行は振る舞われた甘茶で喉を潤し、同行された立部瑞真副住職の法話に耳を傾け、お釈迦様の像に甘茶をおかけした。

同寺は弘法大師空海が大陸より帰朝後、最初に創建したと伝えられ、当大社の神宮寺として栄えた名刹古寺であり、近年は一年を通じ四季折々の花を楽しめる名所としても知られる。

この「花まつり」は、桜・ツツジ・しゃくなげ等の花々が見ごろを迎える、三月二十九日、四月二十八日までの一ヶ月間、宗像観光協会主催により開催されている。

喜色満面の子供達の大きな



副住職による法話



鎮国寺に向かう稚児一行



お釈迦様像に甘茶をおかけする稚児

歓声が、花の匂い香る鎮国寺境内に木霊した。

## 巫女 新人紹介

4月1日付で、神職2名、巫女2名の職員が新たに加わりましたので、ご紹介致します

①名前 ②生年月日 ③出身 ④経歴(学歴) ⑤特技(趣味) ⑥好きな食べ物 ⑦嫌いな食べ物 ⑧奉職理由 ⑨抱負



- しのはら
- ① 篠原 あゆみ
  - ② 平成6年3月生まれ (18歳)
  - ③ 宗像市土穴
  - ④ 公立 古賀竟成館高校卒
  - ⑤ 簿記は1級(全商)と2級(日商)で得意な方です。
  - ⑥ プリン、グラタン
  - ⑦ 椎茸、春菊

- ⑧ 自宅の近くに小さな神社(福足神社)があることもあり、神社の雰囲気大好きで、宗像大社でなら楽しくご奉仕できると思ったからです。
- ⑨ 参拝者の皆様が気持ちよくお参りできるよう、早く仕事を覚えて、信頼される巫女さんになりたいです。



- さの せりな
- ① 佐野 瀬里菜
  - ② 平成5年10月生まれ (18歳)
  - ③ 北九州市若松区
  - ④ 私立 折尾愛真高校卒
  - ⑤ ボーリング  
ベストスコアは200です。
  - ⑥ 焼き肉、納豆巻
  - ⑦ グリンピース、あんこ

- ⑧ 進路指導の先生の薦めもあり、一度参拝した際に巫女さん達の姿が素敵だったからです。
- ⑨ 明るく笑顔で、ときばきと参拝者の皆様をお迎えできるように、いろいろなことを覚え、一日も早く一人前の巫女さんになれるように頑張りたいと思います。

# 東海大学 第五高等学校に ラグビー部創部

四月一日午後二時、東海大学付属第五高等学校ラグビーフットボール部の創部奉告祭が、津山憲司総監督以下選手、マネージャー等約四十名参加の下、本殿で斎行され、必勝と安全が祈念された。

ラグビー部創部は、現総監督の津山先生が、昨年度大阪の

東海大学付属仰星高校(大阪)から副校長として赴任。その後仰星高時代の教え子との再会を契機に、宗像市を本拠地とする「福岡サンックスブルー」によるサポートを受け実現されたとのこと。

現在、部員数は新入生二十名、新二年生一名、女子マネージャー三名、女子三十二名。ラグビーを通しての挨拶、マナー、思いやりといった人間教育を主眼に、人を育てる集団作りを第一に活動し



東海大第五高校ラグビー部



練習風景

ていくとのこと。

津山総監督は「まずは地域の皆様から信頼され、応援していただけるチーム創りを目指したいと考えています。ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、今後ともどうぞよろしく願いいたします」と語っておられた。

ご周知の通り、当県は全国制覇を達成している東福岡高校をはじめとする強豪校がひしめく地域、宗像大神様の御神徳を戴かれ、近い将来是非「高校日本一」を達成していただきたいと思います。

# 出雲大社・大社国學館の学生 境内で実習が行われる

出雲大社が運営する神職養成機関・大社国學館の分散実習が、三月二十四～二十八日の五日間当大社で行われ、男子三名の学生を受け入れた。

この実習は春と夏の二回、日頃奉仕する事の出来ない県外の神社で実習し、神職としての幅広い見識とその自覚を高めるという趣旨で行われている。

初日二十四日、開始奉告祭を斎行、その後指導神職が日程説明、施設見学等の案内を行い、翌朝より本格的な実習に入った。

午前三時三〇分起床、潔斎、本殿の清掃、日供祭準備並びに参列。午前八時三〇分、当大社職員の前参列へ参列、職員らとともに朝の境内清掃、社頭奉仕の実習が行われた。



末社を清掃する学生

また春季大祭が間近であったため、大祭の諸準備や各社殿

の清掃をはじめ、大祭で奉納される「主基地方風俗舞」の温習にも参加いただいた。

## 今回実習された 大社国學館の学生

- 小川 直輝 (本科一年)
- 榊原 成昭 ( )
- 太郎良高光 ( )

(続)

# 浜の寄物

266

いしただし



昨年、NHKは三年間にわたる大河ドラマ「坂の上の雲」(司馬遼太郎)が完結した。

十二月だけの三回であったが、内容がよく、国民の評価も概ね高かったようである。このような三年間の放映の方法は

はじめての試みであった。またテーマとなった日露戦争は日本が超大国ロシアを相手にして、互角に戦い、勝利をおさめたことは世界各国に大きな衝撃を与え、特に植民地支配を受けていたアジアやアフリカの国々にとっても勇気を与えた。

「坂の上の雲」の内容には触れないが、テレビはロシア、イギリスなどの海外にロケを行い、また陸上戦、海上戦の戦闘場面もCGを巧みに使い、大がかりのセットを組み迫力があった。

さて前号では、古賀市立歴史資料館に寄贈された犀角などの根付について紹介したが、今年になって日露戦争のロシアの弾薬箱(木製)の寄贈を受けたので紹介したい。

寄贈者はこの弾薬箱を近所に住んでいた人から



寄贈を受けたロシアの弾薬箱

譲り受けたもので、弾薬箱の入手経路についてははっきりしない。弾薬箱は長さ517ミ、巾330ミ、高さ224ミ、木製の頑丈な作りで、要所には鉄板で補強されている。蓋の裏面にロシア語のメモが添付されている。「37ミ砲用信管付き輸送用実包」とある。

実包とは火薬の充填されている弾丸、実弾の意である。箱の正面には留め具がつき、横に

弾の図が彫られている。箱の底部には60個の弾頭の先端部が彫りこまれ、蓋の上には信管の部分に円形痕として残っている。箱の中には一八九三年刻印され、全体黒塗り。

当時のロシア軍の兵器まで調べていないが、ロシア軍は各戦場で機関銃を使い日本軍を苦しめている。二〇三高地の激戦でも、上から機関銃で乱射、下から登ってくる日本軍に多大の死者を出している。この弾薬箱を見ると37ミとあり、砲弾である。

ロシア側から描いた日露戦争画の中に、倒れた馬や兵、破壊された砲があり散乱した弾薬箱が漂着している。

薬箱がある。寄贈品にもそれに近いものである。

時代は下るが、上海事変(一次一九三二年・二次一九三七年)の写真をみると、山の斜面を弾薬箱を背負い匍匐している日本軍があった。砲の大小によるが、その運搬は大変な重量であり労力を必要とする。

弾薬箱といえば岡垣海岸にも、米軍関係のものであろうか、木製でその表にはロケットという文字が読める。箱の底部にはロケット弾の円形痕が残っていた。旧ソ連時代、日本海でソ連軍が大演習をしているが、その演習後には新潟海岸に弾薬箱が漂着している。



日露戦争の弾薬箱 (絵)



弾薬を運ぶ日本兵 (上海事変)



岡垣浜の弾薬箱

第六〇九回

宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日メット



福津市 若木台

山崎 公俊

見なれたるお宮の屋根をある日ふとつくづくと見ぬ(見馴れてなかった) いつも何気なく見えずこす風景や物がじつくりと見たら、記憶とは違つと気付いた作者の視点新鮮。結句に思い込みと実景の違いを詠む詠み方も試しては。

北九州市 八幡西区

豊田 光子

幸せを計る尺度のあるやなし行けども行けず戻りに戻れず 幸せかどうかは自分で納得するほかには尺度がない。来し方を幸せだったのかと自問する作者。下の句を作者と読者とともに励ますような方向で詠む詠み方も考えましよう。

うきは市 浮羽町

向 則正

夫婦して地底の切羽に炭を掘る明治は遙か作兵衛画見る 山本作兵衛の画で夫婦で働く炭鉱夫に強い印象を受けた作者。印象が淡くなるので(明治期の夫婦が地底の切羽にてともに炭掘る作兵衛の絵に)などと「明治は遙か」を除ける工夫を。

北九州市 戸畑区

田中ハツセ

二才にて姉となりし児乳を飲む赤児の傍にて吾が指を吸ふ 下の子供が生まれ少しせつない二歳のお姉ちゃん。作者はその気持を察しながら、「指を吸う」と事実だけを詠んだところが良い。結句の吾がは子供自身の指なら(我が)に。

福津市

中央 池浦千鶴子

わが生家このバス停の近くなり父母亡くば降りずに過ぎる 両親が住んでいた生家の近くで降りずに、通り過ぎるバス停を見ている作者。胸には両親との思い出が去来する。淡々と詠んであるが寂寥感が伝わってくる。

宗像市

田久 巻 桔梗

唐戸発門司港ゆきの船たてば水脈はひがしへばらけつつ消ゆ 作者は棧橋で船を見送っているのだろう、景が良く分かり方角も効いている。ばらけるは小さな固体がばら撒かれた様を思わせるので、この場合は(広がって)くらいが自然。

福津市 若木台

野間 精一

合馬の筥が今朝のテレビに写されぬ掘り出す翁のほころしげなり 合馬の筥は京都の料亭でも使われるというブランド品。生産者も誇りをもって掘り出すのだろう。面白い切り取り方だが、テレビに映ったことを省き、翁と筥のみを詠む方法も考えられる。

宗像市 池田

森 龍子

裏庭に佇てば大木を照り下る朝日の中に鶯の啼く 気分が良い歌。大木は木の種類が出ると良い。言葉に工夫のあとが見えるが照り下るには疑問。朝日が射す○の木の木の中で鶯が啼くというほうが順当なように思う。

福津市 星ヶ丘

佐々木和彦

屋上の日ざしを浴ぶるゴムマット人工芝のごとくにみどり 作者の人工芝への思いが分かると良いのだが。球場の鮮やかな緑ならば球場の一語が必要だろう、それが入れば個性的な一首になった。ちょっと惜しい歌。

宗像市

日和里 大和美由紀

庭に出で草抜きをればどこからか鋤焼をする匂ひして来る 鋤焼は賑やかな家族団らんや食欲旺盛な人々など、イメージ喚起力が強い食べ物だ。作者の空腹感や、匂いから連想する食卓はと、読者の想像も広がる。

お詫びと訂正

三月号掲載の森龍子さん(宗像市池田)の詠草に誤りがございました。訂正してお詫び申し上げます。

(正) 来し方の苦難は何ぞ震災の津波の映像に覆えさるる (誤) 東し方の苦難は何ぞ震災の津波の映像に覆えさるる

選者詠

虚と実のやうにみっしり重なりて剥がし難しよキャベツの葉と葉 欲しきものあるは若さと雑貨屋で猫のかたちの塩入れを買ふ

第五八三回

俳句作品集

宗像市 日和里

花田いつ枝

樁まつり旋回止まず群れ鶯

編集後記

引き継ぎの過渡期で再登場致しました▼三月末、神職の研修で訪れた福井で学生時代の友人と再会しました。彼の郷里は福島県南相馬市。大震災により、奉職していた神社を離れざるをえない状況となり、紆余曲折した結果、現在は富山、妻子は新潟と単身生活を送っています▼もともとバイタリティ溢れる彼のこと、新天地での活躍も聞き及んでおりました。しかし、実際に会うと一歳になる一人娘と思うように会えないのが最もつらいと、大震災による陰の部分で垣間みました▼翌日は飛行機の時間まで觀光に連れ出して、学生時代にもどつたように楽しませていただきましたが、帰り際「次はいつ会うかなあ、意外とこういう研修の時なんだろうな」と笑った彼の顔が今も忘れられません▼次号より、二十代の若手神職が中心となつて編集して参ります。また別の感性を發揮してくれるものと思いますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。(塚)

発行所 宗像大社社務所・宗像会

住所 千八一一三五〇五 福岡県宗像市田島二二三一

電話 (〇九四〇)六一一一三二(代)

発行人 葦津幹之

編集人 大塚宗延・鈴木祥裕

制作・印刷 セネラルアサヒ

毎月1日発行 定価1年送料共 1,000円